弘前大学同窓会報

第 18 号

発行日　平成29年3月1日
発行者　弘前大学同窓会
題　字　吉田　豊　元学長

地域と共に歩む大学とは

弘前大学長　佐藤　敬

同窓会の皆様には日頃から大変お世話になっており、この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

弘前大学は地域との連携を中心に教育研究を進める大学であることを明確にしてきましたが、これは、以前から弘前大学の本来の使命であり、今後もそうあり続けると思っています。その中で「世界に発信し、地域と共に創造する」という本学のスローガンを追求していくことができると信じています。

弘前大学は昭和二十四（一九四九）年に創立されてから近く七十周年を迎えようとしていますが、この間、地域の方々から多大なるご支援を賜ってきました。また、本学学生の約四割は青森県出身であり、北海道・東北地方出身者は八割以上を占めます。そして、全国に、また特に北日本地域に多くの人材を輩出してきました。私はこの立場になってから、さまざまな職場で活躍されている本学の卒業生にお会いする機会が増え、地域との深い関係をより一層意識するようになりました。「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」では、卒業生の地域就職率一〇％向上を目指しています。これは文部科学省の支援の下、平成二十六年度から五年間の事業として進めていますが、これこそが、弘前大学の使命であり、五年目以降もしっかりと継続していくことが重要と考えています。

地域と共に歩む上で、地域に開かれた大学であることも必須です。ともすれば、大学は特に用事のない人が自由に入る場所ではないと思っておられる市民も多いのではないかと推測しますが、例えば、弘前大学ではキャンパスツアーを設定し、どなたでも、申し込んでいただければ学生ガイドが構内を案内します。また、太宰治文学碑や加藤謙一記念碑、弘高生青春之像など、さまざまな記念碑等を、市民の方々が個人的に巡っていただいても良いのです。今年の六月には、文京キャンパス内に移築していた旧制弘前高等学校外国人教師館に弘大カフェを開設し、一般の方々が弘前大学を気軽に訪れて下さる拠点になればと願っています。さらには、毎年十月末に開催している弘前大学総合文化祭には、多くの市民に訪れていただき、今年の来訪者は一万人を超えました。

弘前大学はあらゆる面で地域と共に歩む大学でありたいと考えています。もちろん、研究の点でも、地域との連携によって成果を挙げるのが理想ですが、研究自体は研究者の自由裁量による部分が大きく、また、すべての学問が地域連携に馴染むわけではありませんので、事実として〝大学を挙げて〟ということにはなっていません。しかしながら、本学の「世界に発信し、地域と共に創造する」というスローガンを、「地域と共に創造した成果をもって世界に発信する」ことで達成できれば理想的と考えています。研究成果の社会還元は、伝統的に大学が十分に心を砕いて来なかったきらいもあり、必ずしも得意ではありませんが、この点においても、地域の方々のご支援をいただきながら実現していければ幸いに思っています。

上にも述べた通り、弘前大学は創立七十周年を迎えようとしています。主な事業としては、地域の皆さんとの連携の下、八十周年までの十年間の教育研究の充実を図っていくことをテーマにしたいと考えています。同窓会の皆様には、引き続きご支援を宜しくお願い申し上げます。

弘前大学創立七十周年にむけて卒業生の結束を

同窓会会長　西澤　一治

同窓会の皆様には、ますますご健勝のことと存じます。

弘前大学は昭和二十四年五月三十一日の文部省（当時）通達により開学致しました。母体は当時青森県内にあった四つの大学専門学校、即ち、弘前高等学校、青森師範学校、青森医学専門学校です。各校はそれぞれ独自に大学設立計画がありましたが、文部省は、新制国立大学は同一地域にある官立学校を合併して一府県一大学とする方針を示していました。幸い戦禍を免れた弘前には旧制高校と師範があり、また医専も青森から弘前へ移転していたのも僥倖でした。弘前は城下町として文化的風土に恵まれ重要文化財も多く、国立大学を設置する学都としての基盤が備わっていたことも好条件でした。青森県では国立総合大学設立期成協力会を結成し、これに呼応して四校で総合大学創設委員会が設けられ、多くの会議を経て骨子が定まり昭和二十三年六月に大学設置認可申請書を文部省へ提出し、明くる昭和二十四年五月の開学を迎えました。当初は文理学部・教育学部・医学部の三学部でしたが、翌昭和二十五年十月に文理学部に農学部の前身となる農学四講座が開設され、昭和三十年に至って農学部として設立されました。昭和四十年に文理学部の改組により人文学部と理学部にわかれ、ほぼ現在の五学部の組織形ができあがりました。来たる平成三十一年に、本学は創立七十周年を迎えます。

各同窓会の発足を見みますと、昭和四十四年に人文学部（平成十一年に再結成）、昭和四十一年に教育学部、昭和二十七年に医学部（昭和四十二年に法人化して「鵬桜会」）、昭和三十一年に農学生命科学部、平成十二年に理工学部「同樹会」（従前の文理学部理学科・理学部・理学研究科の同窓会と新設された理工学部に対する同窓会を束ねて）が設立となっています。また医療短期大学部は医学部保健学科となり、平成十七年にさくら会の名称で同窓会が設立されています。

いずれの同窓会も、その規約には母校の発展に寄与することを謳っており、それが同窓会を結成する本来の主旨の一つでもあります。

卒業生は主として北日本に活動の場がありますが、各同窓会支部は広く全国に存在し、その地域の経済・科学・教育・医療など多岐の分野に尽力されている事は言を俟ちません。同窓の結びつきは非常に強いものがあり、大学の現在と未来を支える力になっています。

来たる七十周年には五十・六十周年と同様に全卒業生の力を結集して、大学の掲げる目標に協力支援をしていきたいと思いますので、ご協力を宜しくお願い致します。

弘前大学COI 最高評価を獲得

10年後の目指すべき社会像を見据えた研究開発を支援する国家プログラムCOI（Center Of Innovation）。弘前大学を拠点とするCOI“真の社会イノベーションを実現する革新的「健やか力」創造拠点”は、青森県の懸案である短命県返上を一大目標に2013（平成25）年度に採択され、この度の中間評価にて医療健康分野COIで唯一、最高のS評価を獲得。研究リーダー・弘前大学教授 中路重之先生に（左写真）にお話を伺いました。

弘大COIの特色

岩木健康増進プロジェクトで十二年間蓄積してきた健康ビッグデータがあります。これは延べ二万人の市民各一人につき、ゲノム、腸内細菌、口腔内細菌など六百項目にもおよぶ健診データから成る世界に誇れるものです。その活用を軸に、産官学民が強く連携し、短命県返上にとどまらず、健康長寿や医療費削減、新産業創出をもたらす地域社会モデルの構築を目指しています。

最高評価を受けて

弘前大学の存在価値を示せたこと、短命県返上への大きな風を呼び込めたことから、喜びというよりホッとしています。一方で、関係する皆様の努力や連携の強さからすると当たり前の評価結果かも知れません。

一生をあずましく

いかにあずましい生涯を送るか。それには何より元気なとき、特に若いときの生活習慣とその自己管理力が物を言います。そしてそのための環境として、地域の産業、経済、教育、文化が一体となって健やか力を育むまちづくりが大切です。

同窓生の皆様へ

青森愛・弘大愛を振り返り、これからの弘大COIにぜひ注目、応援をお願い致します。そして皆様ご自身ならびに身近な若い方々の、健康を勝ち取る力〝健康リテラシー〟への意識醸成にご協力をいただきたいと思います。

農学生命学部

農学生命科学部と地域研究

農学生命科学部長　橋本　勝

同窓会の皆様におかれましては、農学生命科学部の活動に対し様々なご協力を頂き、心より感謝申し上げます。平成二十八年二月から学部長としての任に当たっております。同窓会諸先輩が時間をかけて作り上げたこの学部を更なる飛躍につなげるべく、尽力する所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。

大自然に囲まれた青森県です。農産業が経済の中心となる地域で、本学が果たす役割を考えた場合、弘前大学農学生命科学部の果たさなければならない使命は重大です。学部では、これまで地域研究として行ってきた「白神研究」、「リンゴの科学」、「ナマコ研究」、「津軽地域の未開発遺伝子資源の有効活用研究」を、平成二十六年に「地域資源利活用研究センター」として統合し、さらに発展させようと取り組んでいます。本研究センターでは「微生物」、「農産物」、「海産物」、「畜産物」を横軸とし、「新種・新規物質探索」、「有用性の開発」、「科学的エビデンスに基づく機能の付加」、「品種改良・栽培法・飼料開発」、「市場調査・輸送法研究」、「ブランド化研究」といった研究ステージを縦軸に考え、包括的に農産物をはじめとした地域遺伝子資源の掘り起こしを行っています。

中でも、殿内暁夫教授の展開する白神地域微生物の応用研究が特筆です。「弘前大学白神酵母」と命名した白神山地由来の酵母菌の能力を評価し、その特性を利用したりんご酢（カネショウ）、日本酒（六花酒造、白神酒造）、シードル（弘前シードル工房 Kimori）といった製品の開発に成功しています。本学部の研究成果として新聞報道等でご覧になった方も少なくないと思います。特にシードルは、地域のリンゴ農家さんや、青森県産業技術センター弘前地域研究所と協力して開発されたもので、風味もよく評判です。最近は市内スーパーなどでも見られるようになりました。弘前にお出での折にはぜひお試しいただきたいと思います。本学部の微生物ライブラリーは酵母のみならず、特徴的な菌類がコレクションされているのも特徴です。ペニシリンを始め微生物生産物が人類の歴史に貢献してきたことは有名ですが、私たちも本ライブラリー微生物培養液から人々に役立つ新規物質の探索を行っており、複数の抗菌作用や、殺腫瘍細胞機能を有するものを見出しております。

利活用センターにおけるリンゴ研究では、先行品種の赤い果肉の「紅の夢」は地域の生産者とともに普及の段階に入っております。平成二十八年は紅の夢と同様な赤い果肉を有し果皮色にも特徴のある二品種を登録し、さらに商標を獲得すべく研究を重ねております。また、リンゴ果汁加工残渣を活用したアップルラム、清水森ナンバ（トウガラシ）、ナガイモの高品質化の研究が注目を受けています。

平成二十八年度からは本学部の特性を生かすべく「Farm to Table」と題した研究が開始されました。このプロジェクトは本学の第三期中期計画における目玉研究にすべく、吉澤篤企画担当理事の肝入の下、石川隆二教授を中心に多くの教員が参加し精力的に展開しております。研究成果は社会実装してはじめて地域貢献になります。今後、地域企業様をはじめ地域在住の同窓生先輩のご協力が必要になる局面も多々あると思います。どうぞよろしくお願い致します。

人文社会科学部

「地域と共に歩む」センターをめざして

人文社会科学部地域未来創生センター長
教授　李　永俊

弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター（Innovative Regional Research Center）は、地域の諸課題を真に理解し、その解決策を見出すために、二〇一四年四月に旧人文学部（現人文社会科学部）内に設置されました。青森県は全国的にみて、少子高齢化・過疎化が早いスピードで進行している地域の一つです。域内からの人口減少により、地域の産業・経済状況の悪化、さらには地域の生活基盤の構造的変化が将来的に想定される中で、地域が直面する諸課題の解決にむけて、地域の要請をふまえた先見性のある研究と教育活動が強く求められています。

そのような要請に応えるために、地域未来創生センターは、文化資源・地域文化活用部門、地域づくり総合研究部門、震災復興・災害研究部門の三部門を設け、弘前市及び青森県全域とその周辺地域の諸問題に関する研究に取り組んでいます。研究においては、文化・社会・経済を一つの総体として、総合的な研究対象として捉え、地域の自治体・企業・民間団体との緊密な連携のもとに組織的に解決策を模索します。「発掘」し、学術的に評価するとともに、これらの資源を積極的に有効活用することで、地域の再発見、地域の活性化に貢献します。当センターが先頭に立ち、地域を志向する教育を進め、地域課題の解決に関心をもつ人材の育成に努めます。

二〇一四年度から二〇一六年度までは、人口減少問題に焦点を当て、「人口減少社会の中で持続可能な地域づくり」をテーマに研究活動を行ってきました。ここで、調査研究活動の一部を紹介します。二〇一五年に実施した「中南津軽・東青地域住民の仕事と生活に関する調査」では、この地域へ移住してきた住民の生活実態と移住の理由、移住を可能にした条件、きっかけなどを、住民アンケート調査を通して分析しました。分析の結果、移住の理由、条件、きっかけが地域によって異なるという事実と地元への回帰が両地域に共通した移住の最大の理由であることを明らかにしました。その調査結果は、弘前市と青森市に提供され、両地域の有効な移住促進策を考える基礎資料として活用されています。

また、この地域の二十～二十四歳の若年者の人口流出問題に関する対策を模索するために、「弘前市・つがる地域の大学生・企業の就業に関する意識調査」を弘前市の受諾研究として実施しました。その他に、文化資源・地域文化活用部門では、「東奥義塾高校所蔵旧弘前藩藩校稽古館資料調査」、フォーラム市民と文化財「博物館的想像力　渋沢敬三と今和次郎―民具学・考現学と青森県―」を開催しました。地域づくり総合研究部門では、岩木健康増進プロジェクトCOIとの連携事業、青森県消費者問題研究会との連携で「消費者フォーラム in HIROSAKI」、「住民参加型の空き家可視化方法の検討及び事例調査」、「つがる市人口ビジョン・総合戦略策定基礎調査」などを行いました。震災復興・災害研究部門では、ボランティアセンターと連携して「東日本大震災からの地域復興を考える―北リアス・岩手県九戸郡野田村のQOLを重視した災害復興研究」を行いました。当センターの研究成果の詳細については、当センターが発刊している『地域未来創生センタージャーナル』をご参照ください。

このような研究、教育、地域貢献の取り組みをもって、「地域と共に歩む」センターとして、地域の魅力・活力を高めるために貢献していきたいと考えています。今後とも皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

旧制弘高ゆかりの洋館弘大カフェへ

旧制弘高

弘前大学の前身の一つは、一九二一（大正十）年四月に開校した旧制弘前高等学校です。戦後の学制改革に伴い一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、新制大学として現在につづく弘前大学が設置され、旧制弘高は一九五〇（昭和二十五）年三月に最後となる第二十七回卒業生を送り出し閉校しました。

その約三十年の歴史の中で多くの優秀な人材が輩出されました。ご存知の太宰治（一九三〇（昭和五）年卒）もそのひとりです。

外国人教師館

旧制高等学校の語学教育はヨーロッパから外国人教師を招いて行われました。旧制弘高でも、ドイツ語教師六名、英語教師九名が教壇に立っています。これら外国人教師の宿舎として一九二五（大正十四）年、現在の弘前市富田三丁目に外国人教師館が二棟、左右対称になるように並べて建てられました。建築は、弘前を代表する洋館建築の棟梁・堀江佐吉門下の川元重次郎が手がけました。ときに宿舎は、異国文化に興味を持ち語り合う学生達の集いの場になったようです。

戦後この二棟は、新制弘前大学の一般教官宿舎として幾度かの改装を経ながら使用されてきましたが、二〇〇三（平成十五）年、付近の道路拡張工事に伴い撤去されることになりました。しかし当時の教員や同窓生からの保存を望む声をうけ、二〇〇四（平成十六）年、二棟の建築部材から状態の良いものを活かし、多くの同窓生からの寄付のもと、現在の文京キャンパス内に一棟の洋館として移築復元されました。屋根の傾斜がアンバランスに見えるのはこのためです。こうして旧↖

教育学部

地域協働型教員養成プログラムの実施

教育学部地域連携支援室長
教授　長南　幸安

「人」と「医」は地域に根ざすと言われます。端的に言えば「人」とは教育であり、「医」は医学です。弘前大学でいえば「教育学部」と「医学部」がそれにあたります。文部科学省に求められた大学の再定義におけるミッションとして、地域密着型の大学を本学は選択しました。「人」を育てる役目を担う教育学部も今まで以上の地域との強い連携が必要となります。そこで既に協定を結んでいる本学所在地の弘前市教育委員会に加えて、平成二十七年三月に近隣の黒石市教育委員会・平川市教育委員会・藤崎町教育委員会・大鰐町教育委員会・田舎館村教育委員会と連携協定を医学研究科とともに締結しました。

この「教育学部」と「医学部」が一緒に教育委員会と連携する「医教連携」は国内で初めての試みといわれています。これは中南管内の教育委員会と教育学部・医学研究科が、先ずは地元から様々な問題を解決しようという強い意志を示しています。

その連携の中で進められたのが、地域協働型教員養成プログラムです。附属学校園で行う三年次の教育実習後に、近隣の公立の小中学校で年間を通して行う四年次の「学校サポーター実習」は既に開講しており、担当になった地域の公立学校の先生方にご指導をいただき、学生の教員になるための能力を高めてもらいました。このように地域の力を借りながら協働で学生を良い教員へと養成をするのが「地域協働型教員養成」です。文部科学省の方針として、教員を目指す学生には入学早期からインターンシップを体験させることにより、自己の教員としての適性や意欲を見定めさせるキャリア教育の重要性が示されました。本学では弘前市教育委員会と一年次向けに三年前より実施してきた「地域コラボレーション演習・実習」を、今年度より一年次必修科目とすることで、このインターンシップによるキャリア教育を実施することにしました。

「地域コラボレーション演習」とは、連携協定を締結した弘前市・黒石市・平川市・藤崎町・大鰐町・田舎館村の各教育委員会が企画する児童・生徒と交流できる事業に参加することで、各教育委員会の先生方から指導を受けながら学生が児童・生徒との関係性や学習指導などを体験し、教員を目指す自覚を促すものです。現在は、放課後学習や土曜学習での児童・生徒の指導がメインになっています。数ヵ月前までは高校生だった学生が行うので、いろいろと行き渡らない面は多々ありますが、各教育委員会の先生方の厳しい指導を受けながら、大学の方でも指導をしつつ、良い教員に育て上げたいと考えております。同窓会の先生方にも本学部学生がお世話になる場面がありましたら、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。

制弘高時代を偲ばせる現存唯一の建物が物理的復活を遂げ、それ自体またその内部に太宰関連資料等を展示する旧制弘高ゆかりの洋風資料館となりました。

洋館カフェへ

二〇一六（平成二十八）年、旧制弘高ゆかりの洋館は、資料館からコーヒーハウス「弘大カフェ」へ生まれ変わりました。その誕生日は六月十九日。太宰治と同じです。

コーヒーハウスの出店は弘前コーヒースクール（成田専蔵社長）。おいしいコーヒーを片手に在学生はもちろん同窓生や市民の集いの場として、太宰文学やコーヒーにまつわる歴史、津軽地域の文化・経済や世界情勢、科学・技術など、さまざまな話題が飛び交う様は、まさにかつての宿舎の機能的復活です。

ロゴデザインを手がけた大学院教育学研究科美術教育専修一年の今井紗有里さんにお話を伺いました

応募のきっかけ

所属研究室の指導教員石川善朗先生からお声をかけていただいたことがきっかけです。石川先生はこのカフェの家具などのデザインに関わっていて美術専修の学生にロゴデザインコンペを企画してくださいました。

最優秀賞受賞

何とか採用されたくて二週間程で複数のデザインを作成し応募しました。受賞の喜びはもちろん、授賞式が弘大カフェのオープン当日六月十九日（太宰の誕生日と同）に行われ、その日は私の誕生日でもあるので、喜びはひとしおでした。

難しかった点

建物をモチーフにするところで、ロゴとして簡略化しすぎると建物の印象が薄れますし、逆に精密に作りすぎるとロゴとして成立しなくなりますので、そのバランスが難しかったです。また、二階部分の外壁色は少し青みがかったグレーなのですが、その色を出すことも難しい点でした。

今後の夢や目標は

私は工芸を学んでいます。工芸は身近で実用的な美術であると言えます。工芸を通して地域の活性化に貢献することが私の目標です。

医学部医学科

地域医療に携わって30年

今村クリニック院長
弘前市医師会会長　今村　憲市（昭和46年卒）

昭和四十六年四月弘前大学医学部旧第三内科に入局し、膵性糖尿病、糖尿病性膵障害、膵内外分泌相関、アルコール性膵炎の研究を十五年間行った後、昭和六十一年十二月二日、弘前市松原に内科クリニックを開業しました。開業後は糖尿病治療、消化器癌の早期発見を主体に診療を行い、現在では、四千百二十六名の糖尿病患者が登録され、一人でも多くの患者さんが糖尿病合併症で苦しむことのないように当クリニック職員と一体になって励み、また、肝・胆・膵癌も百七十三例発見し、基幹病院と医療連携を行っております。

平成元年十一月十四日、弘前糖尿病研究会を立ち上げ、糖尿病医療に携わるスタッフのスキル向上のため年二回の研究会を開催し、平成二十八年十二月十四日に第五十四回目の研究会開催となっております。

市民向けの糖尿病教養講座として平成七年から弘前公開糖尿病教室を年一回開催し、毎回百五十名前後の市民の方に熱心にお話を聞いていただいており、平成二十八年十一月十九日に第二十一回目を数えました。

平成十一年九月から深浦町「健康まつり」に五年間当院職員と共に参加し、健康講話、管理栄養士による食事相談、血糖・血圧測定、各種パネル展示等を行って基本検診受診率向上が図れるかを検討しましたが、残念ながら納得のいく結果は得られませんでした。一次予防意識向上には長年の根気強い活動とマンパワーが必要と感じた次第です。

平成二十一年八月に青森県臨床内科医会会長に就任し約七年間各種活動を行って参りました。平成二十三年度より年一回青森県臨床内科医会公開糖尿病講座を青森、弘前、八戸の順に開催しております。また、青森県の内科救急医療に関するアンケート調査を平成二十三年と二十七年に行い実態の相違を報告しております。

この他、開業して間もなくRAB青森放送で毎週日曜日午前八時五十分から九時までサンデーラジオクリニックを放送しジカ熱、サーズ、マーズ、鳥インフルエンザ等気になる病気、医療体制の変化等を織り交ぜてお話をさせて頂いております。お陰様で、農家の方、タクシーの運転手さん、理容師さん等から参考になったとのお声を頂き励みになっております。現在千五百回を超えたところで、もう十年二千回を目指しているところです。

公的な活動としては平成十六年に弘前市医師会副会長に就任し、CMS生涯教育講座を設立し、弘前市の診療所に勤務する看護師の教養講座、市民向けに津軽健康大学を年一回開催し、それなりに医療教養講座として役割を果たしていると考えております。平成二十八年六月十日には同会会長となり一早く「陸奥新報」に「医療情報ほっと」を毎週土曜日に掲載させて頂いております。有能・多彩な医師会の先生方がしのぎを削って執筆しておりますので、大変内容の良い連載となっております。

最後に、弘前市医師会は内科・小児科の休日・夜間診療を三百六十五日、外科は平成二十七年十月から日曜・祝日のみの一次救急医療を行っております。平成二十七年度休日診療出勤医師延べ百七十八人で四千八百十二人、夜間診療は出勤医師延べ七百三十二人で六千二百八人の患者を診療させて頂いております。この体制が円滑にいくために二カ月に一回急患診療所運営委員会が開催され毎回出席しておりますが、この他に医師会には二十二の委員会があります。気力・気合を高めて全委員会参加を心がけて日々奮闘しているところです。

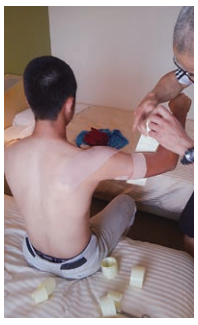
医学部保健学科

甲子園帯同トレーナーの経験

医学部保健学科
助教　石川　大瑛
（平成21年　理学療法学専攻卒）

平成二十八年四月より保健学科理学療法学専攻助教として奉職しました。それまでは地方の総合病院にて理学療法士としてリハビリテーション科で働いていました。

私は平成二十七年度に高校野球の大会であります甲子園に県の代表チームの帯同トレーナーとして帯同する機会がありましたので紹介させていただきます。私が帯同させていただいたトレーナーチームは理学療法士二人、医師一人の三人態勢でした。帯同期間は、一定期間でメンバー交代をすることとなっており、私は二回戦直後から三回戦が行われる日までの六日間帯同しました。活動内容は、練習前後のコンディショニングとしてのマッサージやテーピングの施行、痛みの訴えがあった場合は医師とともに原因を特定しできる限りの治療、練習後のピッチャーのアイシングや打撲などへの対応でした。選手と同じホテルに滞在し、ホテルの一室をコンディショニングルームとして使用していました。一日の流れは、朝食前よりテーピングなどが必要な選手はコンディショニングルームへ集合し、練習に間に合うようにテーピングを施行します。そして練習に帯同しアイシングの準備を行い、練習中に選手の動きをチェックしてテーピングの効果や選手の状態を把握します。練習後は投手のアイシングを行い、ホテルへ帰ってからは選手の就寝時間までマッサージなどを行います。約二十二時ごろに選手をすべて部屋に帰し、選手の状態やテーピングの方針などのミーティングを行い、次の日のテーピングの準備を行っていると、おおよそ熱闘甲子園が終わるくらいの時間となり、就寝するといったものでした。チームは三回戦を延長まで粘って勝つことができましたが、準々決勝が不幸なことに翌日となってしまい力が出せきれずここで敗戦してしまいましたが、選手の頑張りには胸が熱くなりました。



甲子園に出場するような強豪校だとほぼすべての選手がどこかしらに痛みを訴えています。ホテルでの短期的な介入では改善は難しいですが、幸い試合まで時間が少しあったこと、医師やもう一人の理学療法士がスポーツ選手の治療に長けていたため、テーピングや物理療法、マッサージなどでできる最大限の効果は出せたかと思います。試合では痛みやその不安感がなくプレーができているようでした。試合後に選手から感謝の言葉をいただいたときは本当にこの仕事ができてよかったと感動しました。

理学療法士として働かせていただくなかで、患者様からは多くのことを学びます。それをなにかしらの形で自分が住む地域などに還元できて行けたらと考えていますが、私にとってそれはスポーツでした。このような活動は知識や技術と同時に、多くの経験を積む必要があると感じています。現在青森県内のスポーツの大会にトレーナー派遣依頼が来たときは積極的に参加をするようにしています。当専攻では興味のある学生を学生トレーナーとして大会のトレーナーブースに連れていき、現場を体験させています。今後は、自身の活動だけでなく、教員として自分の経験を後輩に伝えていければと考えています。

キャリアセンター

学務部就職支援室長　佐々木宣子

名称新たに

平成二十八年四月一日、これまで学生の就職をサポートしてきた学生就職支援センターは、名称新たに教育推進機構キャリアセンターとしてスタートしました。これまでのさまざまなキャリア支援事業に加え、今年度からは教養教育に全学部必修科目「キャリア教育」を開設するなど、学生のキャリア支援をより一層充実させるべく、スタッフ一同、日々奮闘しています。

キャリアセンターは、併任の石川センター長、専任の小磯副センター長、各学部の兼任担当教員と相談員三名で構成されています。キャリアセンターの事務を司っているのが学務部就職支援室です。当センターで自慢すべきは、やはり三名の専属相談員ではないかと思います。平成二十七年度の相談件数は千四百八十五件で前年度より四百件増え、相談員はフル回転でした。相談内容はエントリーシートの添削や面接指導など多岐に渡り、一対一でじっくりと時間をかけて対応しています。面接指導では、学生の個性を短時間の面接試験でいかにアピールできるか、学生本人と相談員がお互いに協力して作り上げていきます。いわゆる就活マニュアル本に書かれているようなありきたりな受け答えではなく、面接官の心を鷲づかみできるようサポートをしています。また、支援室のスタッフは年間を通じて開催しているガイダンスや説明会の運営、インターンシップの手続きなどのサポートをしています。

「キャリア教育」という言葉が公的に使われるようになったのは平成十一年以降であり、それ以前に大学を卒業された方々の中には、「就職支援という言葉さえ自分の時代にはなかった」という方も多いのではないでしょうか。十八歳人口の減少が続く中で、学生には、社会人としての高い基礎能力＝即戦力が求められています。こうしたニーズに応えるために、問題解決能力、実行力、コミュニケーショ↖

理工学部

一歩一歩

理工学研究科長　加藤　博雄

平成二十八年四月より理工学研究科長・理工学部長を務めております。どうぞ宜しくお願い致します。さて、この任を受けるに当たり、まず初めに考えたことは、弘前大学が目指す「地域貢献」に学部としてどのように寄与出来るかということでした。学部の先生方はそれなりに貢献されているのですが、学部としての寄与を考えると、残念ながら充分とは言えません。そこでまずは「あり方」ということで少々古い話になりますが、学部の歴史を振り返ってみることにしました。

ご存知の方も多いと思いますが、弘前大学理工学部の前身は理学部です。各都道府県に置かれた新制国立大学の多くは工学部主体となっており、大都市圏を除いて理学部を持つ大学は少なく、弘前大学は周囲とは異なる道を歩んで来ました。津軽地方の城下町として栄え、開明の地、文化的拠点でもあった弘前に、いわゆる知の拠点、文理学部（後に理学部が分離独立）が置かれたのは必然だったのかもしれません。

そんな中、産業誘致など工業化の機運の高まりから、今から二十年近く前に、理学部から理工学部への改組を果たしました。思えばこれが地域貢献の最初のポイントだったのでしょう。かく言う私もこの時、長年勤めたつくばの研究所からこちらに異動してきました。当時、六ヶ所村に最先端の放射光施設を誘致する計画があり、その推進役を担ってのことでした。残念ながら、他の大型計画や諸般の事情から実現には至りませんでしたが、その結果、放射光利用研究者が集まる北の拠点として、弘前大学が全国の研究者に知られることになりました。勿論これはほんの一例に過ぎず、多くの先生方のご尽力で少しずつではありますが、理工学部が様々な分野で全国に知られるようになったのもまた事実です。地域貢献としてこれは間接的であるかもしれませんが、長期的視点に立って、まずは知って貰うことが重要であると考えてのことでした。

大学のもう一つの重要な機能、人材育成の面ではどうだったでしょうか。当時の地域の産業構造は理工系が対象となる企業は少なく、地域での就職を望む学生が多い中、受入可能数は少ないものでした。尤も学生の姿勢は、環境変化を好まない消極的なものでしたので、まずは挑戦する心を喚起し、地域のアイデンティティを誇りとする者として中央に送り出してきました。この点でも弘前大学が優秀な人材を送り出しているとの一定の評価を得ることが出来ました。

現在、大学が目指す方向性は、COI、COC及びCOC＋事業に象徴される「地（知）の拠点」形成という、より直接的な地域貢献となっています。これを受けて理工学部も平成二十八年四月に学部改組を行い、新たな一歩を踏み出しました。自然エネルギー学科新設のほか、医用システムコース、応用計算科学コースや自然防災関連分野等の地域に密着した人材育成を目指した各学科の充実を図りました。また、防災講座や各種セミナーを通じて、地域の啓蒙や人材育成、ひいては起業マインドの醸成に係わっていく予定です。

最後になりますが、理工学部にとって地域とは、青森県に止まらず、隣接道県を含む全域と捉えています。特に北海道は、地勢的、歴史的経緯から県内出身者と同数程度の在学者がおり、彼等を県内出身者と同等に考えていくのは当然のことです。理工学部としては地域をより広い意味で捉えた上での貢献を評価頂けるよう、今後とも努力を続けて参りますので、皆様のご理解とご支援のほど宜しくお願い致します。

東京同窓会

地域活性とわたしにできること

東京同窓会会長　津田　良司

私は、卒業後、東京で二十六年間生活し、平成二十七年から、北海道の実家と東京との二重生活をしています。当初は母の見守りの為でしたが、今は、自分にもできる地域貢献をしていると意識しています。

現在、季節労働者の支援を行う協議会で活動しています。北海道と厚生労働省の委託を受けて事業展開していますが、この協議会の主な目的は、冬の時期に仕事がなくなる地元の季節労働者（建築・土木・農業・林業等の従事者）の応援をすることです。この方々は、地元を支える住民でもあります。その意味では大事な地域支援の事業と言えます。技能講習や資格取得、セミナーの開催や就職相談を通して、条件の良い仕事に従事し、給与もアップしていただけます。家族の生活も安定します。このことが、地域の活性化に大きくつながります。

東京で企業戦士として働いていた時には、自分のことで精いっぱいで、社会のために貢献しようと思う余裕はありませんでした。都会に住む多くのサラリーマンは同じだと思います。

実家は北海道十勝の小さな町にあります。農業が基幹産業の典型的な過疎の町です。中学生くらいの時期には賑やかだった市街地も商店がまばらなさびしい街になっています。また、かつて同じ世代の子供たちがいた近所は、限界集落になっています。見渡すと年寄夫婦か独居老人しか住んでいません。でもここには小さいながら祭りも行われています。お年寄りの集まる催しや小さな小学校、中学校の学芸会や運動会もあります。これらはすべて地元で働き生活する方々がいるから成り立っています。長年続いた文化や習慣、顔見知りが近くにいる安心感、長年住んでいる住民同士の防犯意識や見守り意識は、都会では少なくなったセーフティーネットです。本来の地域貢献とはこのコミュニティーを守ることに尽力することです。住みやすく、安定収入が得られる職場があり、次の世代を担う子供たちが安心して育つ環境があること。農業と言う基幹産業があるこの町には、まだ望みがあります。まだ漠然としか描けてはないのですが、この町の活性化プランはいくつか考えられます。私は、先般、総務省がすすめる「地域おこし隊」に採用が決まり、四月から役場で勤務することが決まっています。健康年齢を考えると、これが最後の地域貢献のチャンスだと思っています。

平成元年三月　弘前大学卒業式

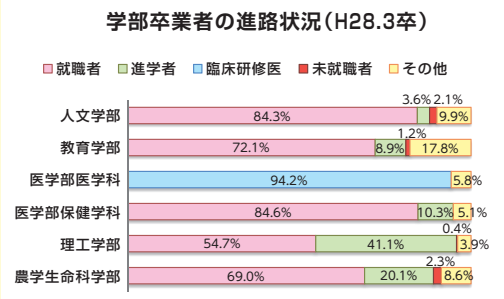
学生時代に四年間お世話になった「北溟寮」もリニューアルしましたが、九十三年間歌い継がれる「都も遠し」の四番に

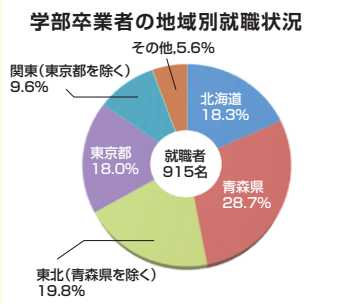
名も埋木の露る、
夢語ろうて雪の国
津軽の富士の暁に
聳ゆる姿胸に抱き
見よ紺青の空高く
起てよ大鵬みちのおく

とあります。思いは寮生時代となんら変わらず、弘前と同じ雪国の北海道で地元に残る仲間たちと、やれることはすべて試してみようと思っています。

↙ン能力などを身に付けさせ、生き方に対するしっかりした考え方を育成するのが「キャリア教育」ですが、もっと身近なものでは「ネクタイの結び方がわからない」とか「説明会に持って行くカバンはどれがいい？」といった窓口相談に応えるのも「キャリア教育」の一環だと思っています。

弘前大学の就職率は平成二十八年三月卒は九十八・四％と過去最高の記録を更新しておりますが、スタッフとして何よりもうれしいのは、学生が「内定をもらいました！」と笑顔で報告にきてくれること、企業の方から「弘大卒の〇〇さんは、非常に頑張ってくれています」というお声をいただくことです。スタッフ一同こうした声に励まされながら学生の「キャリア形成」をサポートしております。





OB・OGの皆様へ

就職活動をする学生からは、OB・OGの方にお会いしてお話を伺いたいという要望がたくさん寄せられています。OB・OGの皆様の中にも「後輩のために一肌脱いでやりたい」と思っている方が少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。キャリアセンターでは、そのようなOB・OGの方を熱烈募集しており、在学生への橋渡しをしたいと考えております。志をお持ちの方は、キャリアセンターのホームページにアクセスしていただき、是非、OB・OGサポーターの登録をお願いいたします。また、弘前大学は「青森COC+事業」において、青森県内就職率三十九・七％を目標に掲げております。青森県内でご活躍されているOB・OGの皆様には、重ねてご協力をお願い申し上げます。

弘大キャリアセンター　検索

弘前大学事務局庁舎リニューアル

文京キャンパスの正門を入ってすぐ右手にある事務局庁舎の改修について、外観や内部の特徴など施設環境部整備計画課にお話を伺いました。

外観の特徴は

外壁の色は、向い側にある総合教育棟と同系色にしました。また、地球環境に配慮して日射を抑制する外装シェード（縦長パネル）とアトリウム部分の外壁色は五十周年記念会館外壁を参考にオフホワイト系の色を採用しました。

アトリウム正門側外壁面に、大学名称サインと大時計を配置しました。大学名称サインは、夜間ライトアップを行うことにより遠くからでも大学の所在を確認できるようにしています。

アトリウム前面に取り付けられたステンドグラスは、桜の花びらをモチーフに、若者が集う学び舎としての明るい活動的なイメージを表現しています。花の中から飛び出すように湧いて出ている虹は、ロゴマークのコンセプトカラーである、五学部を象徴した色彩（紫は人文社会科学部、橙は教育学部、赤は医学部、紺は理工学部、緑は農学生命科学部）を用いて、活力ある未来を表現しました。

内部の様子は

一階エントランスにイルカのオブジェ、重要無形民俗文化財「弘前ねぷた」の鏡絵を設置しギャラリー的な要素を取り入れ、三階共用会議室はアトリウムに隣接しておりステンドグラスを見渡すことができます。中央階段部分にはバリアフリー対応としてエレベーターを設置しました。

また、学長、理事のもとで機動的かつ連携のとれた業務が行えるよう、各執務室の配置やOAフロアによる室内配置変更の容易化について工夫をしました。

改修を振り返って

事務局庁舎は昭和四十七年に建てられた新耐震基準以前の建物であり、当初の想定よりも躯体劣化が大きく補修に時間がかかりました。

完成後の印象としては、大時計、ステンドグラスがアクセントとなり特徴のある建物になったと感じ満足しています。

今後の学内整備は

現在、平成二十八年度学部改組に伴う改修、平成二十九年四月設置の教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）に関する改修及び五十周年記念会館みちのくホールの天井耐震改修を行っています。また、さらに安全・安心で機能的な教育研究環境の実現に向けた計画を進めているところです。

公認会計士試験合格体験記

人文学部経済経営課程4年　布施　晶

私は大学三年の八月に公認会計士試験に合格しました。本稿が皆様に公認会計士という職業について知って頂くきっかけになれば幸甚です。

私が公認会計士を目指したきっかけは、「監査業務の専門性」と「キャリアの多様性」に魅力を感じたからです。会計士は投資家に代わり、投資判断の拠り所たる決算書類の適正性を監査します。その適正性判断には、広く深いレベルでの専門知識・経験が要求されます。また、全ての会計士が監査業務に従事する訳ではなく、税務業務、経営コンサルティング、一般事業会社の経理・財務業務など、会計士のキャリアは多様で自由です。以上の点に魅力を感じ、会計士を目指すことを決めました。

私の場合、大学一年の十月に勉強を始め、大学二年の十二月に一次試験、大学三年の八月に二次試験をパスしました。合格に長い期間を要した上に、合格率約一〇％とハイリスクなチャレンジでしたが、合格により得られるリターンは何物にも代えがたい貴重なものです。私は現在、ある監査法人の非常勤職員として監査業務に従事しています。監査実務で要求される専門知識や能力の水準は高く、自らの無知・未熟さを痛感する日々です。しかし、業務で得られる経験や業界内の人との繋がりは貴重であり、自らの成長を実感する日々でもあります。

今後は、監査業務に従事する中で様々な知識・経験のインプットを図り、クライアントに対してきちんと価値を提供できる会計士を目指す所存です。

留学生の声

私の目からの弘前

人文学部2年　周　叔董（チュウ　シュットン）（マレーシア）

弘大に入学するというきっかけで弘前に来た。弘前は東南アジア出身の私にとって、異国の地である。ここには赤道に住む人々が憧れる四季がある。私にとっての春夏秋冬という概念は、青森の人がマンゴスチンはどんな味の果物かと考えるのと同じだ。実際に体験してみてからしか言えない味である。

今、自分は大学生として弘前に暮らしている。毎日大学生らしい生活を送っている。弘前は私にとって大学の町だと感じている。大学のキャンパスの外、弘前市内でも色々なことが学べる。この人は深いリンゴの知識を持っていてびっくりした。また弘前の掲示板文化が特に面白い。毎週色々なイベントが開催され、すべての情報は掲示板に貼ってある。その掲示板の前に立って、手帳を持ち、記録し、友達と一緒に参加するのは大変面白い。こういうことをすると、自分の生活に対する真面目さを感じた。

私はこの町、大学が好きだ。なぜなら忙しさを感じながら、生活はとても充実しているからだ。つまり、生活のペースが自分にマッチしている。速すぎでもないし、遅すぎでもないし丁度いい。生活ペースを形成する背景には、素晴らしい環境がある。一つ目は、学校の講義が実践研究に力を入れていることである。二つ目は「津軽富士・岩木山」この町定番の風景である。どの角度、季節においても、立派だ。私は山を見るたびに大自然を尊敬する気持ちが溢れてくる。

「吉田基金」TOEIC賞授与式

同窓会では、平成十四年より弘前大学の国際化教育（学生）の支援を目的として、TOEICの高得点者（九九〇点満点中九〇〇点以上）を対象とし、審査の上で賞状と副賞を授与しています。本年度は、教育学部二年の佐藤伸介さんが九五〇点、理工学部四年の中田啓一さんが九二〇点のスコアで授賞し、平成二十九年二月一日に授与式が行われました。

授与式では、西澤同窓会長、基金設立者の吉田元学長、佐藤学長からの祝辞後、受賞者のスピーチがありました。佐藤さんは、予め高得点取得を周囲に表明した上での有言実行、留学の夢、多言語への挑戦を、中田さんは、弘大生協の英会話講座で力をつけ、四百点代から自身も驚く大きな飛躍ができたことを話しました。

この度の受賞を糧に、世界を視野に入れた今後の活躍を期待します。

平成二十八年度　弘前大学同窓会役員名簿

名誉顧問	吉田　豊	弘前大学元学長
顧問	遠藤　正彦	弘前大学前学長
顧問	佐藤　敬	弘前大学長
会長	三上　巽	農学生命科学部同窓会顧問
副会長	西澤　一治	医学部医学科鵬桜会理事長
副会長	岡井　眞	人文学部同窓会会長
理事	千葉　信行	理工学部同樹会会長
理事	上田　敏雄	文理学部卒業生代表
理事	建部　礼仁	人文学部同窓会副会長
理事	相馬　正栄	教育学部同窓会会長
理事・事務局長	工藤　睦男	教育学部同窓会副会長
理事	澤田　美彦	医学部医学科鵬桜会常務
理事	小山内　暢	医学部保健学科さくら会会長
理事	千葉　満	医学部保健学科さくら会副会長
理事	山上　佳男	理工学部同樹会副会長
理事	一戸　洋次	農学生命科学部同窓会会長
理事	板垣　宣志	農学生命科学部同窓会副会長
監事	小笠原　潤	人文学部同窓会副会長
監事	糠塚いそし	理工学部同樹会会員

平成27年度　弘前大学同窓会決算報告書

1，収入の部

項目	平成27年度予算額	平成27年度決算額
前年度繰越分	2,564,446	2,564,446
同窓会費		
人文学部同窓会	241,500	241,500
教育学部同窓会	168,000	168,000
医学部医学科鵬桜会	78,400	78,400
医学部保健学科さくら会	140,000	140,000
理工学部同樹会	210,000	210,000
農学生命科学部同窓会	129,500	129,500
預金決算利息	400	481
計	3,532,246	3,532,327

2，支出の部

項目	平成27年度予算額	平成27年度決算額
印刷費	350,000	347,397
役務費	266,963	277,576
会議費	40,000	44,035
旅費	5,000	2,940
通信費	10,000	6,066
消耗品費	3,000	4,266
雑費	30,000	215,036
予備費	2,827,283	2,635,011
計	3,532,246	3,532,327

平成28年度　弘前大学同窓会事業予算書

1，収入の部

項目	平成27年度決算額	平成28年度予算額
前年度繰越分	2,564,446	2,635,011
同窓会費		
人文学部同窓会	241,500	185,500
教育学部同窓会	168,000	119,000
医学部医学科鵬桜会	78,400	78,400
医学部保健学科さくら会	140,000	140,000
理工学部同樹会	210,000	252,000
農学生命科学部同窓会	129,500	150,500
預金決算利息等	481	400
計	3,532,327	3,560,811

2，支出の部

項目	平成27年度決算額	平成28年度予算額
印刷費	347,397	350,000
役務費	277,576	277,356
会議費	44,035	40,000
旅費	2,940	5,000
通信費	6,066	10,000
消耗品費	4,266	3,000
雑費	215,036	280,000
繰り越し・予備費	2,635,011	2,595,455
計	3,532,327	3,560,811

平成28年度　弘前大学同窓会事業計画

1，事業内容
（1）大学現況内容等の会報（年1回）の発行
（2）各学部同窓会間の連絡調整
（3）弘前大学同窓会ホームページ活用業務
（4）大学関係催事等への後援・協賛

2，事業費
（1）印刷費　350,000円
・会報18号
（2）役務費　277,356円
・役務 @1,132円×242時間=273,944
・遡及（@1,117－@1,132円）×227.5時間=3,412
（3）会議費　40,000円
（4）旅費　5,000円
（5）通信費　10,000円
（6）消耗品費　3,000円
（7）雑費　280,000円
・ホームカミングデー　八戸⇔弘前バス代 ¥150,000
・弘大コーヒーハウスへのタープ寄贈 ¥100,000
事業費計　965,356円

3，その他
弘前大学創立70周年記念事業へ向けての支援

平成28年度　弘前大学同窓会「吉田基金」事業計画

1，事業内容
（1）国際化教育支援

2，事業費
（1）TOEIC副賞　200,000円
・100,000円×2名分
事業費計　200,000円

平成27年度　弘前大学同窓会「吉田基金」決算報告書

1，収入の部

項目	平成27年度予算額	平成27年度決算額
前年度繰越分	2,299,672	2,299,672
預金決算利息	500	377
計	2,300,172	2,300,049

2，支出の部

項目	平成27年度予算額	平成27年度決算額
TOEIC受賞者副賞	200,000	100,000
予備費	2,100,172	2,200,049
計	2,300,172	2,300,049

平成28年度　弘前大学同窓会「吉田基金」事業予算書

1，収入の部

項目	平成27年度決算額	平成28年度予算額
前年度繰越分	2,299,672	2,200,049
預金決算利息等	377	400
計	2,300,049	2,200,449

2，支出の部

項目	平成27年度決算額	平成28年度予算額
TOEIC副賞	100,000	200,000
繰り越し・予備費	2,200,049	2,000,449
計	2,300,049	2,200,449

会報編集委員名簿

委員長　一條　健司
委員　中坪　勝　大倉　邦夫
相馬　正栄　對馬　浩二
中村　光男　樋口　毅
小枝　周平　石川　大瑛
芹田美穂子　戸羽　隆宏
濱田　茂樹　津田　良司
伊森　英明　工藤　睦男

編集後記

◇今号から編集委員長が交代。心許ない新委員長にもかかわらず、前委員長と編集委員並びに関係各位のご支援により本号発行に至ることができた。

◇「地域と弘大」なるテーマで寄稿を募った。地域に開かれた弘大、創立七十周年に向けた各地域同窓生の結束、地域の健康力醸成、地域特産品開発、地域文化資源の発掘、地域協働型教育の実施、地域医療の取組み、地域スポーツ支援、隣接道県を含めた地域指向などの記事が集まった。読者同窓生各位の思い出の地域「弘大」を見つめ関わる機会の促進を期待。

弘前大学同窓会事務局
TEL 0172(39)3490
FAX 0172(36)2132
jm3490@hirosaki-u.ac.jp
http://www.hirosaki-u.ac.jp/information/alumni.html